

事例番号 06

Keywords: 中・軽度知的障害, 電子黒板, 黒板への書き込みと併用, 高等部, 情報モラル育成, 指導目標の達成

(1) e-黒板を活用した情報モラル育成学習

(2) 事例の対象となる児童生徒について

中・軽度知的障害のある高等部生徒

(3) 使用する機器と特長

①機器の名称

- ・ e-黒板 (株) 内田洋行

②特徴

本機器は簡易型電子黒板である。

- ・ パソコン画面を液晶プロジェクターにより映し出し、そのスクリーン上で、専用のペンを用いてパソコンを操作したり、文字や図形を書いたり消したりすることを可能にする。
- ・ 文字を書いた画面をキャプチャーし、後に再生できる。

(4) 使用した機器を選定した理由

情報モラル育成学習においては、モラル場面をシミュレートした映像学習教材が多い。こういった教材は、携帯電話会社などから無償で配布されているうえに、ストーリーもよくできており、活用しやすい。しかしながら、映像を見ただけでは、知的障害がある生徒にとって、過ぎ去った場面が印象に残りにくい。そこで、機器を利用したいと考えた。

本機は黒板に設置できるユニットタイプで、黒板やホワイトボードを簡易に電子黒板に変えることができる。例えば、DVD 映像を一時停止しながら画面に吹き出しとして登場人物の思いを書かせることで、視覚的に考えを引き出したり、記憶に残すことができると考えた。またその画面をキャプチャー機能で記録しておき、その後の振り返り学習に使うことで学習効果を上げられると考え、選定した。

(5) 選定のプロセス

記述なし

(6) 個別の指導計画と個別の教育支援計画

本学習を行った集団は、発達年齢 7・8 歳程度以上の知的障害の生徒 10 名程度である。そのため、各々の個別の指導計画を記入することは省略する。集団としての情報モラル育成学習での実態と課題は以下の通りである。

1 年前に内田洋行の Web 教材により、ケータイモラル学習として「メールで喧嘩シミュレーション」を活用した。その際、対象生徒の過半数が喧嘩になる方を選択しており、感情をそのまま伝えようとした。特に注意すべきは、自閉症の生徒が「喧嘩にならない方が正しいと思うが、喧嘩になる方を選びたい」と言って譲らなかったことである。1 年後に実施した際にも、別の自閉症生徒が全く同じ意見を主張した。そこで、相手の気持ちを考えてメールの文章を考える力の育成と、モラル意識の育成を丁寧に行っていくことが課題であるとした。

(7) 指導の内容

授業では、携帯電話を使う際のルールやマナーを守ること、相手を思いやるコミュニケーションについて学習を行った。掲示板への誹謗中傷の書き込みをされた生徒が、誰にも言えないつらさから登校できなくなってしまう。そんな中、周囲の人の支えにより、立ち直っていくシミュレーション映像を見ながら、ポイントとなる場面で静止し、主人公の気持ちを吹き出しにして考えさせた(図4-6-1参照)。ストーリーと演出がよくできているので、映像にのめり込む生徒も多く、主人公の気持ちの変化に気づかせることができた。



図4-6-1 学習の様子

また対象グループの生徒は、就労に向けた移行支援のための携帯電話掲示板への書き込みを行っている(活用事例「携帯電話 Web サイトを活用した移行支援」)ことから、思いやりのあるコミュニケーションについて様々な教材で学習することが、正しい知識の習得と、よりよい移行支援に繋がると考えた。この機器を活用した授業を通して、実社会で通用するマナーとコミュニケーションを培ってもらいたい。

(8) 支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

e-黒板については、プロジェクター画面に書き込みができ、すぐにまた消せるということが、生徒にとってかなり新鮮で、授業への興味を高められた点で評価できる。学習効果を上げることに大変役立った。しかし一方で、初発効果が高かったともいえる。またe-黒板のキャプチャー機能では、動画がキャプチャーされず、画面に書いた文字とバックのデスクトップ画面しかキャプチャーされなかった。これはOSの仕様上仕方ないとの説明を受けたが、振り返り学習に活かせなかったのが残念である。さらに、e-黒板の消しゴム機能と部分拡大機能の場所が近く、何回も間違え、生徒に指摘された。

(9) まとめと今後の課題

評価のポイントとして、前回の授業で押さえたことが定着しているかということ を重視していたが、数人の生徒が正しく答えられ、機器利用により定着が促進されたと考えられる。

授業のキーポイントで、映像を止めた時、自分たちの生活に当てはめて振り返らせられれば、さらに機器の使用効果が高まったと考える。またe-黒板は簡易型であるので、階を挟んでの持ち運びには大変便利である。反面、授業ごとに設置・設営が必要となる不便さもあり、一長一短である。キャプチャー機能がソフトウェア上のものであるため、OSレベルで制御している映像がキャプチャーできない点はマイナスである。価格面も考慮して、全体として考えれば、コストパフォーマンスに優れていると言えるが、メニューのカスタマイズなどを改善できれば、さらに使いやすいツールになると考える。

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブック－４９例の活用事例を中心に学ぶ導入，個別の指導計画，そして評価の方法－」（2012/3）に記載された内容である。